

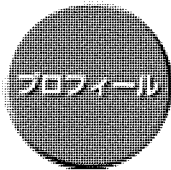
ロータリー講演

講師/森 三郎

ロータリー遠望



第2570地区バストガバナー
森 三郎
(寄居ロータリークラブ)



生年月日 大正10年3月5日
現住所 大里郡寄居町寄居982
学歴 京都大学法学部卒業

【職歴】

- 1944年9月 大蔵省入省
- 1949年4月 浦和税務署長
- 1957年4月 日本専売公社広報課長、工場課長、総裁秘書役
- 1961年4月 退官/ニッコン工業(株)紙工部長
- 1975年5月 常務取締役
- 1989年5月 退任

【ロータリー歴】

- 1972年 寄居ロータリークラブ入会
- 1978年7月 寄居ロータリークラブ会長
- 1989年9月 ポールハリスフェロー
- 1990年7月 米山功労者
- 1991年7月～1992年6月 国際ロータリー第2570地区ガバナー
(寄居にて、地区大会開催)
- 1992年7月～1993年6月 地区諮問委員 拡大カウンセラー
- 1993年7月～1994年6月 地区諮問委員 インターアクト委員カウンセラー
- 1994年7月～1995年6月 地区諮問委員 社会奉仕部門担当諮問委員
- 1995年7月～1996年6月 地区諮問委員 ロータリー財団部門
担当諮問委員 ベネファクター
- 1996年7月～1997年6月 地区諮問委員 ロータリーの友副委員長
- 1997年7月～1998年6月 地区諮問委員 ロータリーの友副委員長
社会奉仕部門担当諮問委員
- 1998年7月～1999年6月 地区諮問委員 ロータリーの友委員長
- 1999年7月～2000年6月 地区諮問委員 ロータリーの友委員長
- 2000年7月～2001年6月 地区諮問委員 ロータリーの友委員会特別顧問

おととひはあの山越えつ花ざかり

当地七尾という所は、私の住んでおります寄居の地の城主でありました北条氏邦が、その晩年に大変お世話になった土地であります。そういう意味で、何とはなしに感謝の念といえますか、懐かしいような感情を抱いていたわけであります。

そうしたところ、先般、そんな私に同期のガバナーでいらした佐々木鐵牛さんがお電話をくださいました。それが本日の講演の依頼のお話でありました。これは私にとっては格別にうれしいお話しでありました。

と申しますのは、しばらく前に私は命に関わるような病を得まして、それから回復してこの方、なるべく家にじっとしておるようにしておりました。ですから私の気分としては、どちらかと言えば、もはやロータリーというものからは半ば退役してしまった、すなわちOBになってしまったような気持ちでおったわけです。

そして佐々木さんから、講演の演題を決めてほしいといわれたのは、たまたま四月の花の盛りごろでして、私は「ロータリー遠望」という題をご連絡申し上げました。その心は、ちょうど去来の俳句「おととひはあの山こえつ花ざかり」という感懐に近いものだと思います。私にとって電車に乗っての長旅は、病気を以て以来今日が初めてのこととなります。自分のはるばると歩んできた過ぎ越し方を振り返れば、どの山もどの山もみな花盛りであったという、大変ありがたいような涙の滲んでくるようなそんな思いがいたすわけであります。そこで一步下

がった気持ちで、ロータリーの姿を遠くから眺めてみたらどんなふうに見えるか、そういった視点からのお話を少しばかりさせていただきたい、そう思って「ロータリー遠望」という題を選ばせていただいたわけです。

「サービス・アバブ・セルフ」とは どういうことか



さて、頭をめぐらせて越し方を振り返ったときに、自分の越えてきた花の山の一つは「ジ・アイデアル・オブ・サービス」という言葉であったことを、しみじみと思わないわけにはまいりません。

これは言うまでもなく、ロータリーに関係を持つ人々にとっては、一番大切な言葉であります。しかしながらこの言葉が「奉仕の理想」というふうに日本語で訳されてしまったために、残念ながら私たちは現在、非常にあいまいな理解のままロータリー活動に携わることになっているのではないかと考えられます。

そこで、サービスという言葉の辞書などで引いて調べてみますと、例えばレストランでウェイトレスがコーヒーを運んでくるのもサービス、テニスで選手が初めにボールを打つのもサービス、日本では商品の値引きをすることや、無料でおまけをつけてあげることまでも、サービスすると言います。またサービス産業といえ

ば、広義では第一産業と第二産業を除いた全ての産業のことですし、リップサービスと言えはお世辞やお追従の意味にもなります。このように考えていきますと、もともとサービスという言葉の意味合いは、想像以上に広いものなのです。

このサービスという言葉「奉仕」という日本語に翻訳してしまったために、印象としては著しくものものしい行為のイメージになってしまった。実は私は神主になるために講習を国学院で受けたことがありますけれども、奉仕という言葉は神道では「神に仕える」ことを意味する言葉ですから、一般的な日本人にとっても、この言葉は何となくそういった重々しい意味合い、何かしら深い味わいの付きまとう言葉なのです。神様とか国家とか、何か大きな偉大なものに対し奉ってこれに奉仕する、奉公する。ましてや「滅私奉公」という人間の姿勢は、決して気軽に何かをサービスしてあげるというような安易な姿勢とは、通じ合えるものではないと思われま

ところで、サービスという言葉は先ほど見ましたようにほとんど捉えどころがないくらいに広い意味合いを持ったあいまいな概念であります。そのあいまいなサービスをロータリーの理念であるとしただけでは、ロータリーそのものがあいまいになってしまいます。

私は「サービス・アバブ・セルフ」というように「アバブ・セルフ」の限定がついてこそ、初めてロータリーのサービスになると考えています。「アバブ・セルフ」がなければ、サービスは日常的な挨拶やしつけ程度の手軽なものに終始してしまうものですが、「アバブ・セルフ」が付くことによってサービスが単なるサービスでない、何らかの道徳的な意味合いを持った行為、あるいは人間の理想につらなる行為になる。それが「アバブ・セルフ」の持つ重要

な意味なのだと思うのです。

「アバブ・セルフ」の道徳的な意味合いは、例えば日本では夏目漱石が「則天去私」と言っている「去私」がそれです。私心を去って、誠意を尽くす、己を尽くすということ。あるいは「超我」ですね、自分を越えた視点で物事を考えるということ。私の好きな「論語」の中に「アバブ・セルフ」に相当する言葉を拾ってみました。ある弟子が孔子先生に対して問いました。「人間が一生かかって追求すべき徳目は何でしょうか」と。孔子の答えはたった一言「それは恕だね」というものでした。恕とは何かといえば、人を思いやり何事も許してあげる心のことです。恕について孔子は「自分のしてほしくないことは他人にしてはいけない」というふうに説明しています。さらにキリスト教の聖書をひもといて見ましたら、有名な「マタイ伝」の山上の垂訓の中にゴールデンルールとして「自分のしてもらいたいことは他人にもしてあげなさい」とありました。奇しくも「論語」と「聖書」が時をほぼ同じくして、一番大事なこととして同じようなことを指摘しているのです。このことは人類が文明を築き上げる中で、さまざまな欲望の衝突や権力のピラミッドを経験しつつ、人間の群れの混乱を乗り越えていくために必要な知恵として、最終的にたどり着いた思想、哲学がこれであったということだと思います。つまり、人類という人間の大きな群れを保つために、基本的に必要なことは何かといえば、自己主張をしすぎるな、相手を思いやり、自分のしてほしくないことは人にもせず、自分のしてほしいことを人にはしてやれ、ということなのです。私はこれが「アバブ・セルフ」の本当の意味であろうと確信しております。

この「アバブ・セルフ」の精神を自らの上に高々と掲げて、さらに一歩前進しようとするときに、そのサービスは初めてロータリアンのサ



ービスになるのです。私たち一人一人が努力してこの境地まで到達し、ロータリーライフの楽しさと厳しさを改めて発見していくということが、これからのロータリアンに望ましいあり方なのではないかと、このごろ考えております。

ロータリーは気づきの旅

さて、それでは「アバブ・セルフ」ということは私どもが一生かかって追求しなければ得られないような、そんな難しい境地なのでしょうか。それについて考えていましたら、あるとき一つの面白いことが浮かび上がってまいりました。

というのは、かつては私も「則天去私」というような境地は、禅僧のような極めて厳格な修行の後によく到達できるものかもしれないと感じていたのでありましたが、皆さんもお聞きになったことがあると思いますけれども、ネスカフェのコマーシャルに「オープン・アップ・ユア・マインド」というフレーズがありまして、これが何度も繰り返されています。心の壁を取り除いて皆で楽しもう、といった歌詞で、心地よいメロディーが聞く者の耳に流れ込んでいきます。心を開く、魂を開放する、世界に対して心の目を開き窓を開け放って自由な風を吹き込ませる、ということ想像するだけでも気分が爽快になります。そしてそれは、そんなに難しいことなんかではないのかもしれない。

そのコマーシャルを何度も聞いていて、私は、ハッとあることに気付いたのです。

「私を去る」というような境地は、もしかしたら一人で到達するには不可能に近いほど遠大な道のりかもしれないけれども、皆で高らかに理想をかざして行動していけば、そんなに困難な道のりではないのかもしれない。つまり、群の哲学は群の中で考え群として実現していけばいいのであって、それを自分一人で実現しようなどと考えること自体が、むしろ愚かなことだったのではないかと。

もっと簡単な例で申しますと、サービスはキャッチボールなんですね。私は佐々木パストガバナーのお宅に昨日お世話になりましたが、お嫁さんやお孫さんの心からのおもてなしを受けまして、すこぶる感激いたしました。襖の開け閉めからお茶の出し方、きちんとした礼儀作法で誠に見事なものでございましたけれども、おじい様に当たる佐々木さんが、いちいちそれに対して楷書の言葉をおかけになっていらした、そのことにまた痛く感銘をしておきました。つまりこれがサービスのキャッチボールなのです。サービスは一方的なものであってはなりません。提供する側と受ける側の心が響き合い、双方向の気持ちの交流があって始めて一つのサービスが完結します。その交流の中でサービスの心が育っていく。佐々木さんのご家族のしつけの姿を拝見して、そんなことをつくづく感じた次第です。



ということは、群の中であってそういうサービスの交換が無数に行われることによって、自然にそこから超我の精神も生まれ、「アバブ・セルフ」の習得の機会もふんだんに発生してくるわけでしょう。

こう考えてくると、私たちにとって群とは、ロータリークラブであり、住んでいるコミュニティであり、国であり世界であるわけですが、そういう「アバブ・セルフ」の心を養うことで、よりよい心の環境をつくり上げていこう、そういう目標を掲げている大きな人間のグループがロータリーなのです。

それから、今朝のテレビ小説「ほんまもん」を見て思ったことなのですけれども、料理人を目指す若い主人公、木の葉が禅寺に入って、野際陽子扮する尼さんからびしびし料理の修業を受けます。厳しい叱責が飛びますが、なぜか見ても気持ちがいいんです。ゴマ豆腐一つをつくるにも大変な思いをして、食材に感謝することを含めて、菜っ葉の切り方まで細かくさまざまな薫陶を受けます。それを見て思ったことは、サービスに「磨きをかける」ことの大切さです。特に職業奉仕ともなれば、単に就業規則に従って円滑に仕事を進めていけば、それで社会に役立っているのだからサービスは完璧だというのではまだまだで、今の方法にさらに磨きをかけていく努力というものなしに、職業奉仕はどうてい考えられないと思うのです。サービスに不断の磨きをかけていく、ちょうど今朝のテレビ小説のようにです。その努力、その向上心の中にこそロータリアンの「アバブ・セルフ」の心がある。「これで十分だ」という気持ちを超えて「いや、まだまだだ」「もっとよくできるはずだ」と前向きな意欲を育てていくこと、これも一つの「アバブ・セルフ」なのではないでしょうか。

このように私たちが気楽に使っている「奉仕の理想」という言葉も、源に立ち返ってみます

と大変に深い意味があります。私はそれに気付くことを「ロータリーにおける気づきの旅」と命名しているのですが、サービスということをごんごん考えて生きてみると、毎日の見聞の中から身につくことがいくらかでも出てきます。昨年のR Iのターゲット「クリエート・アウェアネス」についても、私たちは気づきを大事にし、気づきを生んでくれた機縁に感謝して受け止めることをしなければいけない、というふうなこれを解釈しているわけでありまして。

丸薬の一气飲み

次に、言葉の壁という点について申し上げたいと思います。

ロータリーでは第一義的には英語が正式な言語です。そのために、それを日本語に移し変えるという困難が絶えず横たわっています。

英語を日本語に直してひとたび発表されますと、国内のクラブは当然のように無批判にそれを使うという傾向がございます。

例えば「ロータリーの友」を読みましても、キング会長の言葉として、現在ロータリーの手がけています仕事がすべて羅列されており、地球上のポリオの撲滅、飢餓からの救済、識字率の向上などについて誇らしく記述されております。しかし、これを読んで感じることは、これは確かに嘘ではないけれども本当だろうか、ということです。これらの運動にロータリーが貢献していることは事実です。しかしあたかも百パーセント貢献しているかのごとく表現することは、私たちとしては何かしら面映いわけです。その原因の一つとして、英語を日本語に翻訳する際の問題も、横たわっていると思います。

それから、現在のR I会長リチャード・キング氏のテーマについても「マンカインド・イズ・アワ・ビジネス」が「人類が私たちの仕事」と訳されているわけですが、この翻訳に



関しては幾多の人々がいろいろな意見を「友」にも書いていらっしゃるし、私も書きました。あの標語を掲げて毎週集うことに戸惑いを感じるというクラブもあり、とにかく問題があると云わざるを得ません。

「人類」という言葉、そして「仕事」という言葉、それぞれについてどう解釈すればこの分かりにくさから開放されるのか。ある人は「人間的であることが我々の務めである」という解釈をされ、別の人は、「仕事」というのはディケンズの原作に照らして「博愛」「慈善」等を意味するといいい、私は聖書にあります「人はパンのみにて生きるものにあらず」という言葉にこれを重ねて、何とかすんなりと解釈しようと努力してみたのであります。

しかしながらです。今の私は全く別の心境であります。

どういふことかと申しますと、言葉の壁という問題は、決して今回のR Iテーマのことに限った問題ではございません。人間生活には必ずつきまとう問題なのです。

そもそも言葉というものは、人間と人間の間で思いや感情を伝達する一つの手段なのですが、完全な道具とはとても申せません。例えば皆さんが珍しい酒を飲んだとして、その微妙な味わいを言葉で誰かに伝えようとしても、決して完全には伝えられないでしょう。その酒をそ

の人に一口飲んでもらうことに比べたら、幾千の言葉を並べ何時間話しをしたところで、何も伝わらないことは明らかです。

それでも、やはり言葉は私たちにとって最大のコミュニケーションの手段です。この不完全な道具を介して人と人が理解し合い、信じあえるというのは一体どうしてなのでしょう。私はそれを考えてみました。

信州の善光寺の大歓進に若麻績好美さんがいらっしゃいます。あの方の職業奉仕についての文章が「友」に載ってまして、私にはそれが実に素直に気持ちの中にスッと入りました。一目読んだだけで何の疑いもなくストーンと腑に落ちたのです。それはなぜでしょうか。私は考えてみました。

若麻績さんは善光寺のお坊さんなのだから恐らく嘘は言わないだろう、と感じたことも事実です。あるいはこういうことかもしれない。ちょうど親鸞聖人が師の法然上人を心から信頼して「もしも法然上人にだまされて地獄に落ちても私は全然後悔などしない」と断言したのと同じように、人を信じればその人のいう言葉がスッと胸に入ってくる。若麻績さんはどういうことを書いていたかという、伝教大師の「道心あるところ衣食（えじき）あり。衣食あるところ道心なし」という言葉について、自分は全く一抹の疑問も持たずにこれを信じて生きてきたという告白なのです。これはすばらしいと直感いたしました。これに対しては、もう私どもは何も言う言葉がありませんね。言う必要がない。これが「信」というものの本当の姿でしょう。

若麻績さんが伝教大使の言葉を素直に受け入れ、それを人生の支えにしてずっと生きてこられたように、そのように言葉というものに本当の力を与えるものは「信」なのです。神仏を信じ世の中のために尽くしていれば、そこに衣食は必ずついてくる。しかし衣食が豊かにあるから

とって、そこに信仰や正しい行いがあるとは限らないよということ。これはロータリーの職業奉仕にとっても核心を突いた言葉ですね。そこを若麻績さんはしっかりと書いていらっしゃいました。

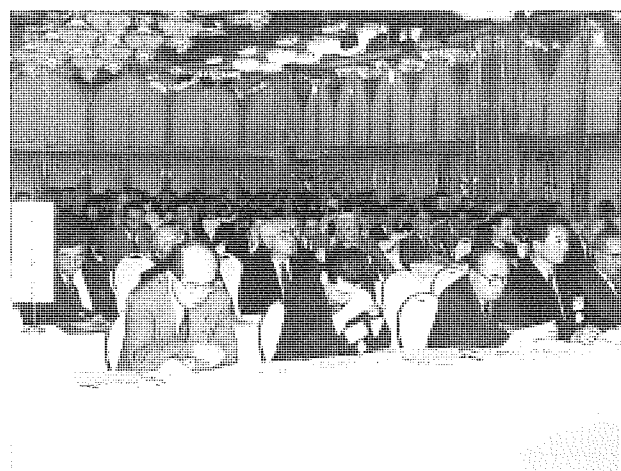
それを読んで私はふと考えたのです。大体私たちは丸薬を飲むときに、一つ一つその成分を調べますか。調べて安全そうだから「よし飲もう」と考えますか。人から「これは風邪によく利く薬だよ」と言われたら、買ってきて一気に飲むでしょう。苦いのもあるので一気に嚥下します。実は人の言うことも丸薬と同じで、一気に嚥下する気概がなければなかなかストーンとは腹に落ちてこないものなのではないでしょうか。言葉のみかは、物事は皆そういうところがあるようです。一気に飲み下す気概がないと何も分かってこない。

「道心あるところ衣食あり。衣食あるところ道心なし」という言葉は、一気に飲み下すべき言葉でありまして、それをどうのこうのといつて腑分けして分析的に説明し解釈して、それでやっと分かったなどというのは、本当に分かったものではありません。ただ頭で理屈をこしらえて理解できたと思っているに過ぎないのです。そういうものの分かり方は偽物ですから、偽物の理解の上に立つ職業奉仕もさぞ付け焼刃になってしまうことでしょう。



そういう点から言えば、先ほどのR Iのテーマなども、あれこれ分析して理解しようとするのではなく、一気に飲み下す分かり方が本当でしょう。会長代理さんのお話を伺ってましたら、まさに一気に飲みをしたような分かり方をなさっていましたね。頭で無理に解釈したような分かり方はつきなみです。体全体で体感的に一度に分かってしまう分かり方、それが本当ではないかと私は思うわけであります。

以上のようなわけで、言葉の壁というものは必ずあるものでして、それを超えて「分かる」ためには「信」という働きがなければ本当に分かり合うことができないだろうということ、そのことがある程度「分かった」ような気がいたしておるのであります。



今のロータリーに欠けているもの

私はもう体が弱ってまいりましたから、体力を要するロータリーの奉仕はほとんどできません。これからは言葉で奉仕する、あるいは顔つきで奉仕するくらいしかできないと思います。

私がロータリーを遠望して、このごろ感じますことは、お金や体力で世の中に貢献することも大事ですが、もう一步深いところでロータリーとは何なのかをきちんと考えてみることの必要性です。とかく今のロータリーにはそれが欠けているのではないのでしょうか。

かつて大阪の町人たちが自分たちで出資してつくった学問所に、懐徳堂というものがありました。徳を懐に入れておいていつでも大切にしようという意味の懐徳堂です。ちなみに懐石料理というのは、温めた石を懐に抱いて一時の飢えを凌ごうということから出た言葉でして、質素な控え目な意味合いでしたが、今では大層な高級料理のイメージになってしまいました。懐徳堂は江戸時代の商人たちが、士農工商の身分制度で賤しい存在であるとされながらも、自分たちで誇りを持ち社会にしっかり貢献できる生き方をしていこうという立場から、真面目に学問を追及した場所です。

彼らの言う「徳」とは何でしょうか。それこそロータリーの職業奉仕の理念そのものです。そして懐徳堂に類する組織は全国に数多くできたようです。懐徳堂はそれらの組織の基地的な役割を果たし、当時の商人たちは遠くからここへ旅をしてきて、熱心に情報交換というか、自分たちのアイデンティティを確立するための思想造りに励んだと思われます。いわば職業奉仕の理念を熱心に語り合っ一晩を過ごした、という記録が多数残っているのです。

私はこれからのロータリーにはそれがもっともっと欲しいと思うのです。電子メールで一遍に情報を流すことも便利ですが、人はやはり向かい合っじかに話をするのが、分かり合うための一番いい方法です。今日のロータリーにはそれが欠けています。ロータリーの本筋というものを弱めないで、この激動の時代に何とか持ちこたえていただきたい。そう思います。

最後に私は、ロータリー本体と財団との関係に触れておきたいと思います。ロータリーは一生かかって人間が踏み行すべき道は何かということ、学び自得する場所です。そして「サービス・アバブ・セルフ」の灯火を多くの人に広げようとしています。であるならば、当然自分

の中の灯火は確固たるものでなければなりません。ところがそれを胸の中に育てる営みが、今のロータリーにはあまりにも少ないのです。

財団の事業はいわば手足の事業です。頭脳は本体であります。私は頭と手足とどちらが上でどちらが下とは申しませんが、頭は小さくて筋肉隆々と言うロータリーができ上がっていて、これは不釣り合いではないかと感じております。どの会議に行きましても、財団のセミナーは大きなウェートを占めているのに、肝心のロータリーの意義を問い続けるといった活動はほとんどありません。

私は財団に対して批判がましいことを言うつもりは毛頭ありませんけれども、ロータリアンとしてももう少しもとになっている理想追求のあり方を深めていただきたい。そのためには「信」ということを見直してもらいたい。もちろん「信」というものに並行して「理」の働きもバランスよくなければなりません、「理」だけで人は動きませんから、その辺をよく考えて「アバブ・セルフ」ということをつかんでいただき

たいと思います。財団は分家ですが、その事業は形となって現れますから赫々としています。それに引きかえ本家のほうは、人々の自覚を高め奉仕の灯火を人間の胸に灯そうとするのですから、形のないしかも困難な運動になりますために、勢い分家のやることの方が盛んに見えるわけであります。そのことをある程度は心得つつも、私としては本家の方の仕事に精を出したいと考えていましたら、こちらにお招きをいただき、佐々木家の昨晚のおもてなしの数々に感激するとともに、ご家族のサービスのキャッチボールの妙味に大変教えられたのであります。ああいうキャッチボールなしにロータリーが育つわけがありません。

ゆくりなくもご当地へ来て、一番大切なことに気づかせていただいたと言うことで、感謝の念でいっぱいでございます。このお話が少しでも皆様の心に種をまくことになれば、これに過ぎる喜びはございません。

これで私のお話を終わらせていただきます。ありがとうございました。

